1 漢文入門

単元のねらい

◆格言や短い漢文を読み、漢文の世界に親しむ。
◆訓読のきまりや熟語の構造を理解するとともに、文章の内容をその叙述に即して的確に読み取る。
◆故事成語の由来や意味と、現代の言葉とのつながりを理解する。
・訓点の施された漢文を読む上で基本となる技術を習得し、スムーズに読めるようにする。
・過去から現代に至る言語文化の流れのなかで漢文の果たしている役割を知り、漢文が日本語の礎をなしていることを理解する。
・漢文のもつ簡潔で力強い文体に触れ、現代日本語において漢語が果たしている役割を知る。

単元の構成

本単元は、「なぜ漢文を学ぶのか」「訓読の世界」「故事成語」という三パートから成立する単元である。まず前半では、漢文学習全体の導入として、編集委員による書き下ろしの文章「なぜ漢文を学ぶのか」を配置し、漢文を巡る文化的背景と漢文訓読の基本的な考え方について解説した。

続く「訓読の世界」では、送り仮名と句読点・返り点・助字（返読文字・置き字・再読文字）について、その概要をコンパクトに示した解説文と実例を併記し、訓点練習が十分に行えるよう配慮した。これらの例文は、故事成語または慣用的な言い回しとして人口に膾炙してきたものから選択した。訓点練習の素材

としてだけではなく、伝統的言語文化の実例として、内容についてもある程度の説明を加えていただけると幸いである。

「漢和辞典の使い方」では漢字の読み方の種類、読み方による意味の違いなど、漢文読解に役立つ漢和辞典の活用方法を具体的に示した。熟語の構造を考えさせることを主題とした「単元の言語活動１」とからめて、漢字の多義性、語順により意味が確定すること、二字が組み合わさり熟語となることで意味が安定することを楽しみながら生徒自身に体験してもらえるとよいだろう。

後半の「故事成語」では、前半で学んだ訓読の技術を確認しながら読み進められるよう、ある程度まとまりのある文章として、「蛇足」「朝三暮四」「断腸」の三編を配置した。とくに「蛇足」と「朝三暮四」の二編はそこにこめられた寓意について発展的に取り上げることも可能であり、その場合には漢文の窓１「中国の寓話」を大いに役立てていただきたい。また、漢文の窓２「現在も使われる故事成語」では、故事成語が使用語彙として世の中の言語活動に登場する実例に触れることで、故事成語を我が国の言語文化の一つとして捉えやすくなるだろう。さらには生徒を取り巻く環境の中に表れる故事成語を探し、故事成語の効果的な使用方法について考えるきっかけとして活用いただきたい。単元の言語活動２「故事成語を『五・七・五』で表現する」では、学んだ内容を「五・七・五」で表現する活動を提示した。

漢文入門

教材のねらい

1 選定の理由

「なぜ漢文を学ぶのか」は、漢文を学ぶ意義・現代とのつながりを理解させる、編集委員の書き下ろしの文章とした。

「訓読の世界」では、短い漢文に慣れさせ、文の構造や訓読法の基礎を理解させるということと、格言としての内容を考えさせるという二つのことをねらいとして教材を選んだ。返り点については、レ点、一二点、上下点などの基本的なものとレ点との組み合わせのみあげ、それ以上の複雑な場合にはあえて触れていない。入門期はどうしても覚えることが多くなってしまうため、漢文に慣れ親しむ段階ということを考慮し、内容を厳選したほうがかえって基礎的事項の理解には有益だと考えたからである。助字としては返読文字と置き字を取り上げ、再読文字も六つ取り上げているが、同様の理由で頻出のものを厳選した。

内容的には伝統的言語文化の実例としてできるだけ人口に膾炙した成語から選ぶことを心がけ、奥深い漢文世界への入門となるよう配慮した。

2 指導のねらい

「訓読の世界」では次のような点を中心に指導することをねらいとした。

(1) 日本に伝わった漢文（白文）が、「訓読」という工夫によって日本の言語文化の根底に位置づけられるようになったことを理解させる。

(2) 熟語の構造を考えることを通して漢文と日本語の構造の違いに気づかせる。

(3) 返り点などの規則を理解して訓読に慣れ、正しい書き下し文を書けるようにさせる。

(4) 短い文の中にも深い意味や教訓が含まれていることに気づかせる。

(5) 漢和辞典の引き方と見方を理解して、自ら漢文を読み進める手段を獲得させる。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	なぜ漢文を学ぶのか	訓読の世界	漢和辞典の使い方	単元の言語活動１
〔知識・技能〕					
(1)ア	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	○	○	○	
(1)ウ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。		○	○	○
(2)ア	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。	○	○		
(2)ウ	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。		○	○	○
(2)エ	時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	○	○	○	
〔思考・判断・表現〕					
B(1)ア	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。		○		
B(1)オ	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。	○			○
〔主体的に学習に取り組む態度〕					
	進んで漢文の世界に親しみ、訓読のきまりや熟語の構造を理解し、学習の見通しをもって、漢和辞典の使い方を理解し、熟語の意味「創作ゲーム」を行おうとしている。	○	○	○	○

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）
単元の言語活動１：熟語の意味「創作」ゲームを行う。【〔思・判・表〕B(2)オ】

指導計画案

指導上の重点目標	学習活動と指導上の留意点
【なぜ漢文を学ぶのか】 【訓読の世界】 1　漢文学習の意義、訓読法の意味や由来について理解させる。 2　熟語をもとに、漢文の基本構造を理解し、慣れさせる。 3　白文・訓点（句読点・返り点・送り仮名）・書き下し文について理解し、訓点を施せるようにさせる。 4　訓点にしたがって音読できるようにさせ、漢文訓読の口調に慣れさせる。 5　返読文字・助字・置き字・再読文字について意味や用法を理解させる。 6　書き下し文を正しく書けるようにさせる。 7　格言の持つ意味について考えさせる。	**導入** ❶ 中学校で学習した漢詩・漢文で印象に残ったものをあげる。知技 思判表 P一一六「なぜ漢文を学ぶのか」を読み、生徒の知識や関心の程度、漢文のとらえ方を把握し、以後の指導計画の参考にする。 **展開** ❶ 基本構造「主語＋述語」「修飾語＋被修飾語」と送り仮名・句読点・書き下し文について理解する。 P一一七「鳥語」「花香」「大器」「晩成」などから、漢文と日本語とで語順が変わらないことを確認する。P一一六下段「ポイント❶」を活用し、訓読・白文・訓点・書き下し文について確認する。 ❷ 返り点の付け方と、返り点が誕生した理由（基本構造「述語＋目的語・補語」が日本語の言語構造とは異なること）を理解し、返読の必要性について考える。知技 P一一七下段「ポイント❷」を活用し、「山に登る」「登山」などから、漢文と日本語の言語構造の違いを確認する。 P一一七～一一九の「送り仮名・句読点」「返り点」の教材について、返り点に従って繰り返し音読する。 ❸ 原文の下にある書き下し文を適宜参照させる。 ❹ P一二一「学習のポイント」1を行う。知技【「学習のポイント」1】 **まとめと発展** ❶ P一二〇～一二二の「置き字」「再読文字」の教材について、返り点に従って繰り返し音読する。歴史的仮名遣いなど、日本の古典文との関連を意識させ、正しく音読できるように指導する。 ❷ 本文を書き下し文に改める練習をする。 P一二三「書き下し文のまとめ」を参照し、書き下す。 ❸ 白文をノートに写し、返り点と送り仮名を付ける練習をする。 返り点・送り仮名を付ける順序については、特に徹底して指導する。 ❹ 置き字の意味や役割、再読文字の返り点・送り仮名の付け方の決まりについて理解する。知技 この段階では、語句の説明や文法事項・文語文法に深入りせず、訓読を第一の目標とする。 ❺ 教材を現代語訳し、それぞれどのような意味を含んでいるのか考える。思判表 漢字そのものが持つ意味についてこれまでの言語経験を元に考えるとよい。漢和辞典の引き方・見方については、P一二四「漢和辞典の使い方」を参照する。 ❻ P一二一「学習のポイント」2・3、「言葉と表現」1、P一二二「学習のポイント」1・2を行う。知技【P一二一「学習のポイント」2・3、「言葉と表現」1、P一二三「学習のポイント」1・2】 格言や成句が現代人の生き方と通じ合う点がないかどうか、問いを発してみる。 ○○テストを実施する。 ○語句・句形問題を実施する。

指導上の重点目標	学習活動と指導上の留意点
【単元の言語活動１　熟語の意味「創作」ゲームを行う】 熟語の意味を「創作」して支持数を競い合い、多くの人に支持される「創作」の特徴を見つけ出す。 1	**導入** ❶ ワークシートと振り返りシートを配布する。 活動の目的を説明する。 **展開** ❶ 漢和辞典から熟語を一つ選び、意味を「創作」する。 知技 ①グループを作り、リーダーを決める。 ②リーダーは熟語を選び、そのほかのメンバーがその意味を「創作」する。 ③リーダーは漢和辞典にある「正解」文を書き写す。 ❷ リーダーは、「創作」文と「正解」文を読み上げる。 ①「創作」文を回収し、読めない文字がないか目を通す。 ②読み上げる順番を決め、各「創作」文と「正解」文に番号を振る。 ③聞き取りやすいよう、はっきりと読み上げる。 ❸ メンバーは「正解」文を予想し、その番号を表明する。リーダーは「正解」文の番号と、それぞれの「創作」文の作成者を発表する。 **まとめと発展** ❶ ゲームを振り返り、支持されやすい文の特徴を話し合う。 思判表 主態 ①リーダーを交代し、全員がリーダーを経験する。 ②選んだ理由を発表し合い、支持されやすい「創作」文の特徴を話し合い、共有する。 ● **振り返りシートに記入させる。**

参考文献

❊教師用

▽**入門・語法**

「漢文入門」小川環樹・西田太一郎　岩波書店　昭三十二
「漢文の語法」西田太一郎　角川書店　昭五十五
「研究資料漢文学10　語法・句法　漢字・漢語」國金海二・木村秀次　明治書院　平六
「漢詩・漢文解釈講座〈別巻〉訓読百科」江連隆　昌平社　平七
「漢文を読むための助字小事典」三浦勝利　内山書店　平八
「漢文語法ハンドブック」江連隆　大修館書店　平九
「新版　漢文解釈辞典」多久弘一・瀬戸口武夫　国書刊行会　平十
「漢文基本語辞典」天野成之　大修館書店　平十一
「新訂　漢文法要説」西田太一郎　朋友書店　平十六
「漢文法基礎」（講談社学術文庫）加地伸行　平二十二
「漢文訓読入門」古田島洋介・湯城吉信　明治書院　平二十三
「これならわかる漢文の送り仮名――入門から応用まで――」古田島洋介（新典社選書）　平二十四

▽**故事成語**

「中国の故事と名言五〇〇選」駒田信二・常石茂編　平凡社　昭五十
「中国名言名句の辞典」向島成美他編　小学館　昭六十三
「中国故事名言辞典」（角川小辞典）加藤常賢他　昭五十六
「故事成語名言大辞典」鎌田正他　大修館書店　昭六十三
「成語林故事ことわざ慣用句」尾上兼英　旺文社　平四
「新明解　故事ことわざ辞典」三省堂編修所　三省堂書店　平十三
「新版　中国名言名句辞典」大島晃編　三省堂書店　平二十三

❊生徒用

「中国の名句名言」（講談社現代新書）村上哲見　昭六十一
「漢語名言集」（岩波ジュニア新書）奥平卓他　平元
「故事成語で中国語を読む」（ちくま文庫）多久弘一　平成二十

図版解説

〈天文二年泉南阿佐井野氏刊本『論語』〉
東京大学東洋文化研究所蔵。
⇩P115

〈改正音訓四書正文『論語』〉
東京都立中央図書館蔵。
⇩P115

なぜ漢文を学ぶのか

漢文に親しむ

漢文の第一時間目にぜひとも触れなければならない問題に、漢文を勉強するのはなぜなのかということがある。漢文を学ぶ第一の理由は、教科書の漢文編冒頭「なぜ漢文を学ぶのか」（P一一六）にもあるように、漢字・漢文が日本語そのものを育てた大きな柱の一つであるという事実がある。これは、現代日本語から漢字・漢語を取り去ってみた場合を想像してみれば、生徒にもすぐ理解できることであろう。

ここでは少し視点を変え、わずか一世紀ほど前にはいかに漢詩・漢文というものが普遍的教養として人々の間に生きていたかを示す例として、明治の文豪夏目漱石と明治の元勲伊藤博文の漢詩を引いてみる。初めは漱石の「自画に題す」。

唐詩読罷 倚二欄干一　唐詩読み罷みて欄干に倚る
午院沈沈緑意寒　午院沈沈　緑意寒し
借問春風何処有　借問す　春風何れの処にか有る
石前幽竹石間蘭　石前の幽竹　石間の蘭

次は伊藤博文が晩年に人生の無常を嘆じた「京都の作」（現代語訳を付す）。

老来豪気易二銷磨一　老来　豪気銷磨し易し
五十星霜夢裏過　五十星霜　夢裏に過ぐ
欲下向二東山一尋中往事上　東山に向つて往事を尋ねんと欲すれば
荒墳累累故人多　荒墳累累　故人多し

年をとってからというもの強い気力は消えてゆき、
五十年の歳月は夢のように過ぎてしまった。
東山に向かって過去のことを聞こうとすると、
荒れ果てた墓が重なりあって多くの友が眠っているのが見えるばかりだ。

前者は漱石の日常における漢詩の位置を、後者は元勲の懐古の手段としての漢詩の功用を示している。伊藤博文は「春畝」という号を持つ漢詩人でもあった。単にこの例だけをもって漢文を学ぶことの意義を説くことはできないが、日本と縁のないものだと思っていた漢文が意外なところに顔を出していることに気づくには、充分であろう。明治の日本人にとっては、日常のささやかな興趣を描く（夏目漱石「自画に題す」）ときにも、京都の東山を望んで老年の感慨を述べる（伊藤博文「京都の作」）ときにも、漢詩が身近な自己表現の手段だったのである。

日本の古典としての漢文

漢文を学ぶ意義について、「なぜ漢文を学ぶのか」は、次のように述べている。

漢文の文献は次々に海を渡り、日本にもたらされました。私たちの祖先は、この漢文によって先進の文化を学び、豊かな文学や思想、文化を創り出してきたのです。

ここにいう「先進の文化」とは、儒教や諸子百家の哲学、仏教

などの宗教、政治学、法律や社会制度、文学、絵画・彫刻などの芸術、その他ありとあらゆる分野が含まれる。日本人にとって漢文は何よりも、そうした先進的な文化を受容するための手段だった。漢文によって取り入れられた文化が、その後の日本の文化の基底となったのである。そうした漢文受容の歴史には模倣の段階もあっただろう。しかし重要なのは、先人たちが模倣に終始したのではなく、先進的な文化を受容することによって、その刺激のもとに、日本独自の様々な文化を生み出したということである。

日本で漢文学が隆盛した時期は、奈良から平安にかけての遣唐使の時代、鎌倉室町の五山文学の時代、江戸時代の三期である。第一・第二の時期には学問はほんの一握りの階層による独占物だった。だがその時期においても、中国伝来の文化・学問と向きあうことによって、日本人は日本独自の文化を生み出してきた。一例をあげれば、「文選読み」という習慣がある。六世紀初頭に中国・梁で編纂された『文選』は、平安時代には、主に学問の家柄である博士家で伝承・学習されてきた。その博士家で行われたのが、「文選読み」である。それは、一つの漢語を、まず音読みし、つづけて訓読みするというものだった。たとえば、「細細腰支」という句を、「細細（さいさい）とほそやかなる腰支（えうし）のこし」と読むのである。こうした読み方は、学問の伝承のために工夫されたものだったと考えられるが、それは漢語に対する理解を深めただけでなく、対応する和語についての認識を深めるものでもあった。いわば、漢語と対比することを通じて、和語の表現力を発見し創造してきたのである。

江戸時代には学問が広く一般に普及したこともあり、漢学は知識人・読書階層に要求される必須の科目になって官民ともに隆盛を極めた。たとえば、中国伝来の儒教についての独自の研究が進み、さまざまな思想家があらわれ、オランダを通じて入ってきた西洋の学問を受容する基盤ともなった。漢詩・漢文の創作も盛んにおこなわれ、松尾芭蕉の『おくのほそ道』などの文章に見られる美意識は、漢文の世界を基底に持つものだった。明治になると漢学の相対的地位は低下したが、それでも江戸時代の余勢はまだまだ及んでいた。先に触れた夏目漱石・伊藤博文（春畝）の漢詩はそのほんの一例である。

現代の高等学校で漢文が必修科目になっているのもこの流れをくむものである。つまり、日本人が長きにわたって対象化し、そこからさまざまな発見をし、日本独自の文化を生み出す糧となってきた漢文を自らの古典としてとらえなおすことが、高等学校における漢文の目標なのである。高校の漢文では「日本の古典」として日本人が親しんできた漢文の世界を追体験し、理解することが重要なのであって、中国の文学や思想それ自体を専門的に学習することが第一目標なのではない。もちろん素材としては多くが中国のものだから、文化的背景なども含め、外国の文献としてできるだけ正確に読むという態度は重要だが、それと同じ程度に大切なのは、訓読の方法を理解し、日本人が受容してきた漢文の特徴を把握し、訓読の語調、日本語としての漢文脈に親しむということである。漢文学習の始めに、「日本の古典」として漢文を位置づける視点を確認しておきたい。

訓読の「国際性」

訓読という方法について、「なぜ漢文を学ぶのか」は、次のように述べている。

漢文を中国以外の地域の言語で読むために、各地域で独自の方法が生まれました。特に日本では、漢文を日本語の文章として読む訓読の方法が広く行われるようになりました。私たちの祖先はこの訓読によって、漢文の持つ簡潔さ、論理性、表現力などを日本語に取り入れ、言葉を豊かにしてきました。

訓読の方法は、確かに日本で独自に発展したものである。しかし、それは孤立した試みだったわけではなく、類似の方法は、朝鮮半島やベトナム等でも行われていたことが明らかになっている。朝鮮半島では「口訣」と呼ばれ、漢文を読む際、朝鮮語（韓国語）の要素を漢字で書き加え（日本の訓読の送り仮名にあたる）、漢文を朝鮮語の語序によって読むことが行われた。新羅時代から「吏読」（りとう）と呼ばれる表記方法も行われた。それは、「顧問教是去等」（「顧問せられたならば」の意）のように、朝鮮語の助詞や用言の活用形などを漢字によって表記したものである。さらに高麗朝時代の漢文訓読資料等も発見され、研究が進められている。またベトナムでは、ベトナム語独自の音を表記する「チューノム」という文字が生み出され、漢字・チューノム交じり文の表記法が行われた。これも、ベトナム語による、一種の訓読法と言えよう。日本の漢文訓読法は、東アジア世界で広く行われた漢文読解の試みの中から生まれ、その中で最も体系化されたものだったと言える。訓読法は確かに日本独自のものであるが、そこには国際的な背景があり、孤立した方法ではないのである。

現代において、中国について専門的に研究する場合には、当然外国語としての中国語を学ぶ必要があるだろう。だが、高等学校の漢文の授業においては、「日本の古典」として漢文を学ぶことが目標である。日本人が長く訓読によって読解・受容し、それによって日本語そのものを豊かにしてきた漢文を、学びの対象としているのである。「なぜ漢文を学ぶのか」は、「現代の私たちが日本の文学や文化の根源を見直し、現在の日常の言葉を深く理解するためには、漢文を学ぶことがどうしても必要なのです」と述べている。日本語の奥行きを理解し、豊かな日本語を生み出して行くためにこそ、漢文の学習が求められているのであるが、その背景には東アジア世界で広く行われた漢文読解の努力があったことを忘れてはならない。

訓読の「ゆれ」

漢文訓読体は、平安時代以来、さまざまな曲折をへて今日行われるような形に落ち着いたもので、独特のスタイルを持ち、その中にはいろいろな時代の語法が混在している。また、訓読と原漢文の正確な解釈とには、ズレが生じることもある。それは多くの場合、簡潔な原文を訓読するだけでは意味が伝わらないことがあるためであり、古文に現代語訳が必要なのと同じ理由である。

しかしより重要なのは、訓読そのものの「ゆれ」だろう。これは主に時代とともに日本語の語法が変化し、また訓読の習慣にも変化が生じたためである。たとえば、「大器晩成」という文は、「大器は晩成す」と訓読するのが通例であるが、「大いなる器は晩く成る」と訓読することも可能である。現在の訓点の規則と訓読

法は、江戸時代にほぼ定まり、明治以後に広く定着した規則・習慣に依っているが、言葉の習慣は完全に固定できるものではない。そのため、訓読する人による個人差等が出る場合もある。さらに、訓読は日本語への翻訳でもあるため、解釈の相違によって読み方が異なる場合もある。こうした訓読の「ゆれ」は、むしろ解釈や表現の多様性として受けとめるべきものだろう。高等学校の漢文でこの点にあまり厳格になる必要はないが、少なくとも指導者はこれらの「ゆれ」が生じ得ることに自覚的でありたい。

中国語と日本語

中国語と日本語とは漢字が共通し、訓読という方法によって二千年以上も前の文章まで読めてしまうことから、どこか類縁関係にある言葉のような錯覚を抱かれがちだが、実は全く系統の異なる言語である。訓読に入る前に、基本的にどのような相違があるのかを簡単にみておこう。

世界の言語は、文法上次の三つに大別するのが普通である。

①屈折語　ヨーロッパ諸語のように、語形つまり格や語尾が変化し、それによって文法的機能を示すもの。

②膠着語　日本語や朝鮮語のように、単語や語幹に語尾や接辞が接合していくことによって文法的機能を示すもの。漢文訓読における送り仮名の必要性はここから生じるわけである。

③孤立語　中国語のように、語形変化も接辞の接合もなく、いつも決まった語形のもの。

漢文の語順が英語のそれと似ていることに生徒たちは気づくであろうが、それ以外の点では似ていない。このように中国語は日本語とも英語とも全く異なる文法体系を持った言語である。しかし、中国語が「孤立語」であることによって、「膠着語」としての日本語の活用語尾や助詞等を送り仮名として補い、語順を変える返り点を添えれば、日本語として読むことができる、つまり訓読できることに先人たちは気づいたのである。

日本の古典文法との関連

生徒にとって漢文を学ぶということは、具体的には訓読された、すなわち日本語化された文章を学ぶということである。したがって訓読を指導するうえで、日本の古典文法との関連を常に意識させるということが大切になってくる。かつての漢文入門では、素読がよく用いられた。素読の重要性は今でも変わりがないが、現代では、その学習環境が整っていない。学習が進んで漢文に興味を持てるようになった段階で試みてみるとよいだろう。

漢文訓読に用いる助動詞

現在の訓読法で一般に用いる助動詞を一覧表にまとめておく。

語	意味・働き	漢字
ず	打消	不・弗
る・ら（ル）	受身	見・被・所・為
た（リ）	断定	為
し（ム）	使役	使・教・令・遣
べ（シ）	可能・許可・認定・当然・義務	可
ごと（シ）	比況	若・如
なり	断定	也

書き下し文

書き下し文の書き方を生徒に指導するときは、P一二三「書き下し文のまとめ」に記した、以下の点に注意が必要である。

①送り仮名は平仮名（歴史的仮名遣い）にする。
②日本語の助詞・助動詞に当たる漢字は平仮名にする。
③訓読のときに読まない文字（置き字）は書かない。
④再読文字は、最初の読みは漢字を用い、二度目の読みは平仮名にする。

（安藤　信廣）

訓読の世界

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 中学校で学習した漢詩・漢文で印象に残ったものをあげる。
知技(1)ア・(2)ア・エ、思判表B(1)オ

❶・生徒は（小）中学校ですでに故事成語・唐詩・『論語』を学習している。ただし変則的な書き下しや現代語訳（鑑賞文）で学んでいる場合も多く、断片的な語句の形であげる者も多いだろう。
・中学時代の漢文学習を振り返ることを目的とし、できるだけ生徒どうしで相談させてみるとよい。
・P一一六「なぜ漢文を学ぶのか」を読み、生徒の知識や関心の程度、漢文学習のとらえ方を把握し、以後の指導計画の参考にするとよい。

【評価】・言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・我が国の文化と中国の文化との関係について理解しているか、確認する。
・（小）中学校での学習を振り返ったり、P一一六「なぜ漢文を学ぶのか」を読んだりして、時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、発言や行動を観察する。
・我が国の言語文化について理解しているか、発言や行動を観察する。

■展開

学習活動のポイント

❶ 基本構造「主語＋述語」「修飾語＋被修飾語」と送り仮名・句読点・書き下し文について理解する。

❷ 返り点の付け方と、返り点が誕生した理由を理解し、返読の必要性について考える。知技(2)ア

❸ P一一七～一一九の「送り仮名・句読点」「返り点」の教材について、返り点に従って繰り返し音読する。

❹ P一二一「学習のポイント」1を行う。知技(2)ウ

〔学習のポイント」1〕

❶・P一一七の例文を用いて、「主語＋述語」「修飾語＋被修飾語」の文構造は、漢文と日本語とで語順が変わらないことを理解させる。

・P一一六下段「ポイント❶」を活用し、訓読・白文・訓点・書き下し文について確認する。

・送り仮名は、限られたスペースの中で明確に読み取れるよう、片仮名で、漢字の右下に小さく施すことを確認する。

・漢文では主格を表す助詞「ガ」は送らないことを確認する。

《板書例》

訓読文

主語　述語
鳥　語ル。
＋
花　香ル。
←
鳥　語リ、花　香ル。

書き下し文

主語　述語（動詞）
鳥　語る。×鳥が語る。
＋
花　香る。×花が香る。
←
鳥　語り、花　香る。

◆×「鳥が語り、花が香る。」
→主格を表す「が」は用いない。
○「鳥は語り、花は香る。」
→強調を表す「は」は用いられる。

◆訓読
＝白文に送り仮名・句読点・返り点を付ける。

書き下し文
＝訓読した漢文を日本語の語順に書き表したもの。

《板書例》

主語　述語
天　朗。

＋

主語　述語（形容動詞）
天　朗らかなり。

主語　述語
気　清。

←

主語　述語（形容詞）
気　清し。

天朗、気清。

天朗らかに、気清し。

《板書例》

修飾語　被修飾語
大〉　器。

＋

修飾語　被修飾語
晩〉　成。

←

主語　述語
大器ハ　晩成ス。

（大なる器は　晩く成る。）

◆二字熟語はそのまま音読みで読む場合が多い。

修飾語　被修飾語
大なる〉　器。

＋

修飾語　被修飾語
晩く〉　成る。

←

主語　述語
大器は　晩成す。

❷・Ｐ一一七下段「ポイント❷」を活用し、「登山」「読書」は「山に登る」「書を読む」という日本語の文構造とは異なり、「述語―目的語（補語）」となることを確認する。

・漢文と日本語の文構造が異なる場合に、日本語の語順で読む方法として、「返り点」が施されたことを理解させる。

・漢字と日本語との関係について常に自覚させる。

【評価】返り点の学習を通して、我が国の文化と中国の文化との関係について理解しているか、確認する。

《板書例》

「漢文と日本語の語順」

語順が同じ構造

1主語＋述語
日没（日が沈む。）

2修飾語＋被修飾語
美食（おいしい食べ物。）
予定（あらかじめ定める。）

語順が異なる構造

1述語＋目的語
読書（本を読む。）

2述語＋補語
登山（山に登る。）

↓語順を入れ替えて訓読するために

「返り点」が生まれた

◆「ヲ」を送った語を**目的語**、
「ニ・ト・ヨリ」を送った語を**補語**と呼ぶことが多い。

述語	目的語	述語	補語
転ジテ	禍ヲ	為ス	福ト。

❸原文の下にある書き下し文を参照させ、範読、斉読、指名読みなどを場合に応じて使い分け、繰り返し音読させる。

❹返り点の施された文字があったら必ず下の文字から上の文字へと返ること、返り点の施されていない文字は上から一つ残らず読んでいくこと（ただし置き字は例外）などが基本である。

「学習のポイント」1のような、文字でなく□からなる文を読むとき、こういう原則が極立って意識されるはずである。

【評価】「学習のポイント」1を行い、訓読のきまりを理解しているか、ノートや提出物などにより確認する。

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ P一二〇～一二二の「置き字」「再読文字」の教材について、返り点に従って繰り返し音読する。

❷ 本文を書き下し文に改める練習をする。

❸ 白文をノートに写し、返り点と送り仮名を付ける練習をする。

❹ 置き字の意味や役割、再読文字の返り点・送り仮名の付け方の決まりについて理解する。知技(2)エ

❺ 教材を現代語訳し、それぞれどのような意味を含んでいるのか考える。思判表B(1)ア

❻ P一二一「学習のポイント」2・3、「言葉と表現」1、P一二三「学習のポイント」1・2を行う。知技(1)ウ・(2)ウ

〔P一二一「学習のポイント」2・3、「言葉と表現」1、P一二三「学習のポイント」1・2〕

❶指導者の範読に合わせて原文を目で追い音読し、返り点の必要性を理解する。

❷ここでつまずくようであれば、また訓読の規則の確認、音読練習に戻る。書き下し文をつくる場合に留意する点については、P一二三「書き下し文のまとめ」を参照する。

❸白文を写すことはそれだけで文構造を考える訓練になるので、機会をみて実施したい。ただし無理があるようならあらかじめプリントする。訓点を付ける場合には、先に返り点だけをつけたりはせず、読む順番のとおりに「訓点」（送り仮名と返り点）を付けることが大切である。

❹漢文訓読上、返り点の一般的な原則から外れるケースが二つある。それがこの置き字と再読文字である。再読文字の学習にあたっては、再読という現象が起こる理由を理解することが第一である。「将来」と「未来」の対比などからも再読文字のニュアンスをつかむヒントが得られるかもしれない。

【評価】現代の言葉にもある「将来」「未来」などと漢文のつながりについて理解しているか、発言や行動などにより確認する。

❺辞書で確かめる前に、漢字そのものが持つ意味についてこれまでの言語経験を元に考えることが大切。漢和辞典の引き方・見方については、P一二四「漢和辞典の使い方」を参照するとよい。

【評価】教材の格言の内容を的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❻返り点に従って語順を追い、置き字は書かずに、助詞・助動詞は平仮名にするという決まりが身についていれば、「学習のポイント」2・3はできる。四字熟語の訓読は、文の構造を見分けることが大切である。「主語＋述語」、「修飾語＋被修飾語」、「述語＋目的語（補語）」、「否定詞が上にくる形」などを見抜くことである。返り点を付けてヒントにしてもよい。訓読できた段階で意味が言えるようになれば相当分かってきたということである。

【評価】・「言葉と表現」を行い、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ノートや提出物などにより確認する。
・「学習のポイント」を行い、訓読のきまりを理解しているか、ノートや提出物などにより確認する。

▼送り仮名・句読点・返り点　これらについては教科書にある説明で十分かと思われるが、少し補足しておくと、まず、上下点でも間に合わずさらに返らなければならないときは、甲乙点（甲・乙・丙…）、それでも間に合わないときは天地点（天・地・人）を用いる。ただし、これらはめったに使われない。また一二点や上下点などの最初の点に限られる。

送り仮名について、どこから送るかは、現代の標準表記に従い、原則として活用語尾から送り、誤読のおそれのある場合は、多めに送っておけばよい。

訓読と現代語訳

鳥語り、花香る。

鳥は美しい声でさえずり、花は芳しい匂いで香る。

【出典】　南宋・呂本中「庵居」

「鳥語り、花香る」

（「語り」）にする。また、さらに連なりを強くするなら「語りて」と読んでもよい。主語に「は」を付けて「鳥は語り（て）、花は香る」と読めば「鳥語」と「花香」の対が強調される。

2　漢字の読みは「鳥・語・花・香」と一字ずつのまとまりなので、一字の文字は訓で、二字の熟語は音で読む、という原則どおり訓読みで「とり・かた（り）・はな・かを（る）」と読む。

3　美しい春の風景を表現する描写としてしばしば用いられる。時に「花香鳥語」と順序を逆にして使われることもある。

指導上の注意点

1　「主語（鳥）＋述語（語）、主語（花）＋述語（香）」の構造。「主語＋述語」の語順は漢文も日本語も同じであるから返り点は不要。送り仮名だけ付けてある。「鳥語」は後の「花香」に連なっているので「語」を終止形（「語る」）にしないで連用形

訓読と現代語訳

天朗らかに、気清し。

空は晴れ渡り、空気は澄んでいる。

【出典】　王羲之「蘭亭集序」

「是日也　天朗、気清、恵風和暢。」

指導上の注意点

1　前の「鳥語、花香」と同じく「主語＋述語」を繰り返した構

造。ただし述語部分が、「鳥語、花香」では動詞であるのに対して、この「天朗、気清」では形容動詞（朗）と形容詞（清）になっている。「鳥語、花香」のときと同じく、「天朗らかにして、気清し」や「天は朗らかに（して）、気は清し」と読むことも可能。

2　この四字句も一字ずつに区切って読むので、原則に従えば全て訓読みとなるところだが、「天」は「あめ」や「あま」などという訓は使わず「てん」と音読みする。「気」には訓はないので、これも一字だが「き」と音読みする。

3　晩春の晴れ渡った江南の空を描いた字句。王羲之は晩春、会稽（紹興）の蘭亭で同好の士と曲水の宴を開く。これはその時一同が作った詩につけられた序文中の言葉。

訓読と現代語訳

大器は晩成す。

大きな器は、出来上がるまでに時間がかかる（大人物は晩年になって大成するものだ）。

【出典】「老子」四十一章
「大器晩成、大音希レ声、大象無レ形。」

指導上の注意点

1　「主語」（大器）＋「述語」（晩成）の形になっている点では前の例文と同じだが、そのそれぞれについて「修飾語＋被修飾語」の構造「大（なる）＋器」／「晩（に）＋成（る）」になっている点を指摘したい。語順は日本語と同じ。

2　「晩成す」は、漢語（熟語）にサ変動詞「す」の付いた例。漢文ではきわめて例が多い。

3　漢文訓読で、音訓の読み分けをどのようにするのかもなかなか難かしい問題で、生徒の戸惑う点である。絶対的な規則のようなものはないが、読んで意味の通る自然な日本語であるように心がけることが第一である。ただし一応の目安として、一字の文字は訓（例：君〈きみ〉）で、二字の熟語は音（例：君子〈くんし〉）で、ということはいえる。「大器晩成」は、これらの原則に従って読める例である。

4　「大器」は偉大な人物の比喩。偉大な人物は晩年になって大成するものである、との意。単に「大器晩成」ともいう。

訓読と現代語訳

禍を転じて福と為す。

災難にうまく対処して、それを幸福に変えてしまう。

【出典】「戦国策」燕巻第九
「斉人紫、敗素也。而賈十倍。越王勾践棲二於会稽一而後残レ呉覇二天下一。此皆転レ禍而為レ福、因レ敗而為レ功者也。」

指導上の注意点

1　この文は日本語の語順と異なり、「述語＋目的語・補語」の形で、一字返るレ点を用いる例。レ点は形が列をなして飛ぶ雁に似ていることから、古く雁点ともいう。

2　返読する場合、「ヲ・ニ・ト・ヨリ」などの送り仮名が振られることが多い。

3　「失敗を転じて成功と為す」という意。この言葉は「禍福は糾纆のごとし」（禍福はあざなえる縄のようなもので、どうなるか分からない）という成語を生み、人の世の運不運の変転極まりないことをいうときにしばしば使われる。

訓読と現代語訳

少年老い易く学成り難し。

若い人はすぐに年を取り、学問が成就するのは難しい。

【出典】「偶成」
少年易レ老学難レ成　一寸光陰不レ可レ軽
未レ覚池塘春草夢　階前梧葉已秋声

指導上の注意点

1　この文は返読文字「易・難」を含んでおり、「易老」「難成」を日本語の語順で読むために返り点を用いている。返読文字という文字があるわけではなく、動詞以外でいつも返り点のつく文字をまとめて返読文字と名付けたに過ぎないことに留意させたい。

2　返読文字で返る場合は、動詞の場合と異なり、「ヲ・ニ・ト・ヨリ」などの送り仮名は振られないことに注意させたい。

3　「若い時代はあっというまに過ぎ去るため、学問が成就するのは難しい」という意。「一寸の光陰、軽んずべからず。」と対で用いられ、時間の大切さを伝えるのに引用されることが多い。

訓読と現代語訳

人学ばざれば、道を知らず。

人は学ばなければ、道を得ることができない。

【出典】「礼記」学記
「玉不レ琢、不レ成レ器。人不レ学、不レ知レ道。是故古之王者、建レ国君レ民、教学為レ先。」

次は「不」に返り点があるので下にゆく。「知」にも返り点があるのでさらに下にゆき「道」を読む。「道」には返り点がないため上に戻って「知」を読み、さらに「不」に戻って読む。

また、本文には否定語「不」があるが、「不」は返読文字（動詞以外で返り点の付く文字）である。「ヲ・ニ・ト・ヨリ」を付けずに返ることに注意させる。

指導上の注意点

1　主語の後に否定語を伴った条件文がくる構造。レ点を重ねてあるので生徒は複雑なように考えるが、読む順序の考え方は前の二つと変わらない。教え方としては、返り点は原則として右上の字に効いていると教えると指導しやすい。

本文の読み方は、「人」を読み、「不」を読もうとしたら返り点が効いている。それでいったん下へゆき、「学」に返り点がないことを確認して「学」を読み、上に戻って「不」を読む。

2　一字ずつの区切りなので原則として全て訓読みする。

3　人は学ぶことによって初めて物事の道理を心得、才能を発揮できるようになることをいう。本例文の後に続く「昔の聖王は国を建て、民に君臨するにあたっては、まずなんといっても学問と教育を大事にした」という記述もうなづける。学問の目的や教育の方法を説く「礼記」学記篇の言葉である。

訓読と現代語訳

羊頭を懸けて、狗肉を売る。

（肉屋が）看板として羊の頭を掲げておいて、実際には犬の肉を売る。

【出典】「無門関」六則
「懸二羊頭一、売二狗肉一。」

指導上の注意点

1　一二点を用いた例文。一二点は二字以上上に返る場合に用い、連続して上に返る場合には「…↑三↑二↑一」と用いることも

できる。この例文は単文を二つ重ねた形なので、「〇二〇一、〇二〇一」となり、「〇二〇一、〇二〇二」とはならないことを理解させたい。（「二→三」は上へ返っていない。）「懸」は二点が効いているのでいったん下へゆき、「羊頭」を読んでから読む。次も「売」は二点が効いているのでいったん下へゆき、「狗肉」を読んでから読む。

2　この成句には類句がたくさんある。最も古いものとしては「晏子春秋」内篇雑下の「懸二牛首于門一、而売二馬肉於内一也」があり、「牛首馬肉」のように四字熟語としても用いる。

「羊・牛」の肉（美味なもの）、「狗・馬」の肉（それに劣るもの）をどのように捉えた成語かを発問してもよい。

3　見せかけだけ立派で内容が伴わないことの例え。肉を売るときには、こうしたことが実際に多く見られたのであろう。庶民にもよく分かる生活に根ざした例えである。

訓読と現代語訳

百聞は一見に如かず。

他人から百回聞くことは、実際に自分の目で一度見ることに及ばない。

【出典】「漢書」趙充国伝
「百聞不レ如二一見一。兵難二険度一。臣願馳至二金城一、図上方略。」

指導上の注意点

1　レ点と一二点の両方を用いる例。返り点は「不レ如一見」の形にはならないことに注意させる。

2　「不レ如レA」は「Aニシカズ」と読み、「Aに及ばない（Aのほうが程度が甚だしい）」の意。比較を表す。「如」は、もと「同等である」の意。「不レ如」は、「同等でない→及ばない」の意になる。

3　自分で体験することこそが重要である、との例え。活字に頼ったり、人の話を鵜呑みにする人に対する戒めとしてよく使われる。

訓読と現代語訳

吾日に吾が身を三省す。

私は一日に何度もわが身について反省をする。

【出典】「論語」学而

「曽子曰、吾日三省吾身。為レ人謀而不レ忠乎、与二朋友一交而不レ信乎、伝不レ習乎。」

指導上の注意点

1　二字の熟語に返って読む例。現在では二字の間に「ー」（ハイフン・竪点などという）の符号を付けるが、これは分かりやすさのためにすることで一般書では必須の点ではなく、昔は付けない場合もあった。ただし、高校での学習や大学入試では必ず付ける。三字の熟語の場合は、「□二□一□」のように付ける。

2　「三たび吾が身を省みる」とも読むが、ここでの「三」は具体的数字というより「何度も」の意にとるべきであり、その意を生かすためここでは「さんせいス」と読んだ。

訓読と現代語訳

君子は其の言の其の行ひに過ぐるを恥づ。

君子は自分の言葉が実践を上回ってしまうのを恥じる。

【出典】「論語」憲問

「君子恥二其言之過一其行一」

指導上の注意点

1　大枠が「主語（君子）＋述語（恥）＋目的語（其言之過其行）」の構造になっていることに気づかせることが大切である。そしてその「目的語」は、「主語（其言）＋述語（過）＋補語（其行）」になっているので、いったん「行」から「過」に返り、そして「恥」に返る。つまり「三↑二↑一」と戻ることになる。「之」が主語と述語の間に置かれると、文全体が名詞句として扱われる。

2　「言」の背後に「発言」を想定できるように、「行」の背後にも「行動」という熟語を想定できる。「言」だけでなく「行」も「こう」と音で読むことが可能。

3　実践を伴わない言葉は吐くべきでない、という言葉。「巧言令色鮮し仁」や「剛毅木訥仁に近し」という言葉と相通ずる「論語」の言葉である。

訓読と現代語訳

君子は言を以て人を挙げず。人を以て言を廃せず。

優れた為政者は、立派なことを言う人がいてもその言葉だけで登用したりしない。その人が立派でないからといってその人の言葉まで切り捨てることはない。

【出典】「論語」衛霊公
「子曰、君子不レ以レ言挙レ人。不レ以レ人廃レ言。」

指導上の注意点

1　レ点の例。「まずレ点に従って一字上に返り、次に一二点に従って読む」ということは、送り仮名も含め次のような順番で読むということである。
①君　②子　⑦不レ　④以レ　③言　⑥挙レ　⑤人。

生徒に返り点・送り仮名を付ける練習を課す場合には、このように返り点の種々のパターンに注意させる必要がある。

2　「君子」は、ここでの意味のほか、学徳ある立派な人の意にも用いる。対義語は「小人」。「以」は、原因・理由・方法・手段等を表すのに広く用いる語。

3　君子は、人物とその人の言う言葉の内容の双方を見て人を判断する、ということ。情にほだされずに人を判断することは、なかなか難しい。

訓読と現代語訳

人の悪を称する者を悪む。

他人の悪い点を言い立てる者を憎む。

【出典】「論語」陽貨
「子貢曰、君子亦有レ悪乎。子曰、有レ悪。悪レ称レ人之悪一者上。」

指導上の注意点

1　一二点を挟んで、上下点でもう一度返って読む例。一二点と上下点とが錯綜する（「下…二…上…一」）ことはなく、必ず「下…二…一（…中）…上」のように「二」を「上（中）下」が大きく包みこむ形になる。

2　「之」は日本語の助詞（連体修飾）に当たるので平仮名書きする。「悪」は、「わるい」の意のときの音は「アク」、「にくむ」意のときの音は「オ」。「称」は、わざと言い立てる意。

3　人の欠点をあれこれ言うな、という言辞は「論語」の各所に見られる。

訓読と現代語訳

児孫の為に美田を買はず。

子孫によく肥えた田畑を買い残したりしない。

【出典】 西郷隆盛「偶成」

「幾歴辛酸志始堅、丈夫玉砕恥甎全、一家遺事人知否、不下為二児孫一買中美田上。」

指導上の注意点

1　上中下点を用いた例。「一二点」を挟んで下から二か所に返る形。もし、さらにもう一か所上に返ることになれば「上下点」では間に合わないので、「甲乙点」を使う。

2　「子孫」ではなく、「児孫」になっていることに注意。

3　作者西郷隆盛は、明治維新の功臣。辛苦に耐えることこそが人を鍛えるのであり、そのため子孫に財産を残したりせず、あえて苦労させるのだということを述べている。

▼置き字　漢語の主な分類に①実字（名詞）・虚字（動詞や形容詞・形容動詞）・助字（それ以外のもの）の三分類と②実字（名詞・動詞・形容詞・形容動詞）・虚字（それ以外のもの）の二分類とがある。高校の学習では①の助字や②の虚字に当たるものを「助字」（助辞）と呼んでいる。漢文読解にはこの「助字」の知識が欠かせない。江戸期の名だたる漢学者も「助字」についての著述には精魂を傾けているが、それは「助字」の理解が漢文の読解力を左右するほど重要であったからである。

さらに細かに見てみると「助字」の中でも訓読するときには読まない字がある。それを「置き字」という。中国語で読むときにはきちんと読むので一定の意味を持つことは言うまでもない。「置き字」はその前後の送り仮名に反映されたり、訓読の読みになじまなかったりするために読まれないだけであって、決して軽視すべきものではない。置き字は次のように分類される。

①前置詞的に用いられるもの　　於・于・乎
②接続詞的に用いられるもの　　而
③文末に用いられるもの　　矣・焉・兮（・也）

ただし、右にあげたのは用法の概略で、これらの語も場合によっては接続詞や疑問詞として読む場合がある。

訓読と現代語訳

良薬は口に苦し。

病気によく効く薬は口に苦く感じるものである。

【出典】「孔子家語」六本
「孔子曰、良薬苦二於口一而利二於病一。忠言逆二於耳一而利二於行一。」

指導上の注意点

1　前置詞的に用いられる置き字の文例。「於…」は動詞の前に置かれた場合、「(…に) 於いて」と読まれることがあるが、動詞の後に置かれた場合は置き字として扱われ、読まれないことが多い。置き字の場合、「於」は読まれないが、そのニュアンスは「於」のあとに置かれる語の送り仮名（「に・より・よりも・を」）に表れ、動作の行われる場所や時間、動作の起点や対象、比較などさまざまな関係を表すが、基本的には、「…について」「〜の上で」「＝という場で」という語感の言葉である。「于」や「乎」も「於」とほぼ同じように用いられる。

2　この文において「於」の意味は、そのあとに置かれた「口」の送り仮名（…に）に表れており、「動作の対象」を表す。「於」を英語の「to」と考えると意味を取りやすい。

3　自分に対する忠告は聞き入れにくいものだが、ためになるものだ、ということを例えたもの。

訓読と現代語訳

青は之を藍より取る。

青の染料は藍の草から取り出す。

【出典】「荀子」勧学
君子曰、「学不レ可二以已一。」青取二之於藍一、而青二於藍一、冰水為レ之、而寒二於水一。

指導上の注意点

1　前置詞的に用いられる置き字の文例。「於…」は動詞の前に置かれた場合、「(…に) 於いて」と読まれることがあるが、動詞の後に置かれた場合は置き字として扱われ、読まれないことが多い。置き字の場合、「於」は読まれないが、そのニュアンスは「於」のあとに来る単語の送り仮名（「に・より・よりも・を」）に表れることをしっかりと教えたい。

2　この文において「於」の意味は、そのあとに置かれた「藍」

の送り仮名（…より）に表れており、「動作の起点」を表す。

「於」を英語の「from」と考えると意味を取りやすい。

3　文字通り解釈すれば、青という染料は、藍という草から抽出する、という意味である。これに続く「藍よりも青し」とともに、「弟子が師よりも優れたものとなる」という意味で用いられ、「出藍の誉れ」という成語にもなっている。

訓読と現代語訳

朋友に信ぜられず。

友人に信用されない。

【出典】「中庸」

在レ下位一不レ獲二乎上一、民不レ可二得而治一矣。獲二乎上一有レ道。不レ順二乎親一、不レ信二乎朋友一矣。順二乎親一有レ道。反二諸身一不レ誠、不レ順二乎親一矣。誠レ身有レ道。不レ明二乎善一、不レ誠二乎身一矣。

指導上の注意点

1　前置詞的に用いられる置き字の文例。「於…」は動詞の前に置かれた場合、「（…に）於いて」と読まれることがあるが、動詞の後に置かれた場合は置き字として扱われ、読まれないことが多い。置き字の場合、「於」は読まれないが、そのニュアンスは「於」のあとに来る単語の送り仮名（「に・より・よりも・を」）に表れることをしっかりと教えたい。

2　この例文において「於」の意味は、そのあとに置かれた「朋友」の送り仮名（…に）と、前に置かれた「信」の送り仮名（…られ）に表れており、「受身」を表す。「於」を英語の受動態で用いられる「by」と考えると意味を取りやすい。

3　為政者となるために上の者に信頼されるにはどうすればよいかを説いた文の一節。元の文では、「友人に信用されないならば、上の者に取り立てられることもない。」とある。

訓読と現代語訳

過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。

過失を犯したことに気づきながら、それを改めないことこそが本当の過失だ。

【出典】「論語」衛霊公

「子曰、過而不レ改、是謂レ過矣。」

指導上の注意点

1　「而」は接続詞的に用いられる置き字。この例文では置き字として扱い読んでいないが、「而して」（そして・順接）、「而るに・而も・而れども」（しかし・逆接）などと読む場合もある。読む場合は置き字とはいわない。

2　「而」は前後をつなげる接続詞。前後の文脈から順接・逆接どちらの意味も表す。「而」のもつニュアンスは、「而」の前で最後に読まれる語の送り仮名として表される。この例文では「…〈動詞の連用形〉テ」「…〈形容詞・形容動詞・助動詞の連用形〉シテ」と読まれており、順接のニュアンスを表している。

3　「矣」は文末に用いられる置き字。書き手の強く言い切る気持ち（断定の語気）を表す。

4　誰でも過ちを犯す。それを改めないのがいけない、と説く。過ちを合理化してしまう現象は古今東西よく見られる。

訓読と現代語訳

心焉に在らざれば、視れども見えず。

目の前のことに集中できなければ、いくら見ても目に入ってこない。

【出典】「大学」伝七章

心不レ在レ焉、視而不レ見、聴而不レ聞、食而不レ知二其味一。

指導上の注意点

1　「而」は接続詞的に用いられる置き字。この例文では置き字として扱い読んでいないが、「而して」（そして・順接）、「而るに・而も・而れども」（しかし・逆接）などと読む場合もある。読む場合は置き字とはいわない。

2　「而」は前後をつなげる接続詞。前後の文脈から順接・逆接どちらの意味も表す。「而」のもつニュアンスは、「而」の前で最後に読まれる語の送り仮名として表される。この例文では「…〈連体形〉モ」「…〈已然形〉ドモ」と読まれており、逆接のニュアンスを表している。

3　「焉」は文末に置かれた場合は断定の語気を表す置き字と判断して読まれないことが多いが、ここでは存在を表す動詞「在」の補語として「ここ」と読まれている。

4　「助動詞『ず』の已然形＋ば」を仮定条件〈…ならば〉として解釈しているが、古文で学んでいる文語文法だと確定条件〈…ので〉と訳すため、違和感を抱く生徒もいるだろう。漢文訓読には上代から近世まで、さまざまな時代の文法が残っているため、「已然形＋ば」を仮定条件・確定条件のどちらで解釈することもありうる、というのは生徒と共有したい。文語文法における已然形は、口語文法では仮定形となっていることも、合わせて確認しておきたい。

5　上の空では見ても見えない、つまり何事も心が正しくなければ、正しい判断や行動ができない、ということを言ったもの。

「視」は「みようとしてみる」の意味で、「見」は「みえる」の意味。英語の「watch」と「see」と考えるとよい。

訓読と現代語訳

三人行（さんにんおこなへ）ば、必（かなら）ず我（わ）が師（し）有（あ）り。

何人かで行動すると、必ずその中に自分の師とすべき人がいる。

指導上の注意点

【出典】「論語」述而
子曰（ハク）、「三人行（ヘバ）、必有（アリ）二我師一焉。択（エラビテ）二其善者一而従（ヒテ）レ之（ニ）、其不善者（ノ）一而改（アラタムル）レ之（ヲ）。」

1　文末に用いられる置き字の文例。「焉」は断定の語気を表す置き字として扱い、読んでいない。また、そのニュアンスを表す送り仮名を前後に送ることも難しく、訳出もしにくい。

2　「焉」は前の例文で「ここ」という代名詞の読み方が示されている。他にも理由を尋ねる疑問詞として「いづクンゾ」と読む場合もあり、このあとの再読文字の例文で登場する。

3　「三人」は文字通り「三人」とする解釈もあるが、「三」は多数の意味を表すことが多いので、「何人も」と解釈した。

4　何人かで行動すると、かならずその中には自分の師とすべき人物がいる、という意味。「行」は「行けば」と読んで「連れ立っていけば」とするものもある。

▼再読文字　再読文字の指導でまず注意すべきことは、再読という現象は、訓読するにあたって生じてきた便宜的な技術なのであって、もともとの漢字自体になにか特別な意味や機能があるわけではないのだという点である。「日本語の副詞と助動詞の意味を兼ね備えた文字」という説明がなされることが多いが、これもその漢字に他と区別される複雑な意味合いがあるかのごとき印象を与えかねないので、賛成し難い。再読ということは、あくまでその字の字義をできるだけ正確に汲み尽くそうとして、訓読の技術上結果的に起こってきたことなのであって、もとの漢字自体に特別の意味合いがあって起こったことではないのである。

　ではなぜ特定の文字についてだけ再読法が固定したのかというと、これらの文字にはいずれも意味のきわめて接近した文字があるので、それらとの区別を明確にする必要があったということが一つある。例えば、「将」（まさニ…（ント）す）は事柄のうえで「…しかかる」というニュアンスの語だが、これは

「欲」（…ントほっス）が、もともとは心のうえで「…しようと思い立つ」とあるのとを区別しようとして再読し、「如」が状態や外見の類似をいうのに対して、「猶」は理屈のうえでの類似をいうので再読して区別する――といったような具合である。「不」に対する「未」、「当」「宜」「須」相互の関係などの例も同様である。

また、「当応」（当ニ…応シ）や「猶如」（猶ホ…如シ）のような連用の語法があり、これらの一字一字を落とさず訓読しようとすることから習慣化して、「当」「猶」一字だけの場合も再読することになったとする説もある。

訓読と現代語訳

未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らんや。

まだ生も分からないのに、どうして死が分かるだろうか（いや分からない）。

【出典】「論語」先進
「曰、敢テ問フ死。曰、未ダ知ラ生、焉ンゾ知ラン死。」

指導上の注意点

1　再読文字として最もよく見かける「未」を使った形。再読文字という言い方は、返読文字と同じように日本人が訓読する上で気をつけるべき文字をまとめて名付けた名称であり、再読文字、という文字が元から存在したわけではない。訓読の過程で二度読まないと意味が取りにくい文字をまとめて再読文字と呼んでいるにすぎず、中国語では一度しか読まない。

2　再読文字の「いまダ…ず」などという読みは決まった読みなので、P一二三の下段の表を用いて他の再読文字の読みと一緒に覚えておくとよい。また、読みを細かに見ていくと、「未」（いまダ…ず）の二度目の読みは打消の助動詞「ず」なので、その直前の用言は未然形で読む必要がある。漢文を読むことは、文語文法を身につける絶好の機会であることを意識させるとよい。

3　孔子が弟子に「死」について尋ねられて応えた言葉である。まずはしっかり生きることが大事であるという孔子の現実主義が伺える。

訓読と現代語訳

老いの将に至らんとするを知らず。

老いがやって来ることにも気がつかない。

【出典】 「論語」述而
「其為レ人也、発憤忘レ食、楽以忘レ憂、不レ知二老将一レ至云爾。」

指導上の注意点

1　再読文字「将」を用いた例文。この文字は「まさニ…す」と覚えさせることが多いが、「将至（将に至らんとす）」のように「す」の直前には「ント」が送られるため、「まさニ…（ント）す」と覚えさせるとよい。「ン」は意志を表す「む」であり、漢文では「ム」と表記せず、撥音便で「ン」と表記する。（古田島洋介『これならわかる漢文の送り仮名』新典社P一二三）

2　本例文は、再読文字「将」を読んでからさらに上に返るという構造になっているため、「レ点」が用いられている。「レ点」は、まずレ点に従ってレ点を挟んだ下の文字から上の文字に返り、次に一点に従って二点のついた文字に返る。

3　「老」は名詞なので、「老イ」と送り仮名を送らず、「老」とする場合もある。

4　文構造としては「知」の前に省略された主語があり、述語「知」の後に目的語として名詞句「老将至」が置かれている、という構造。名詞句「老将至」の構造も「主語（老）＋修飾語（将）＋述語（至）」という構造になっている。名詞句の主語には送り仮名として「ノ」を送ることが一般的だが、ここでもそのようになっている。また、名詞句は「知」の目的語なので、「まさニ…ントす」の文末が連体形で読まれ、さらに目的語に送られる送り仮名「ヲ」が送られている。

5　孔子が、自分のことを語った言葉である。「学」や「道」に熱中し、「老いが忍び寄るのも気がつかない」、それが私だと。

訓読と現代語訳

時に及んで当に勉励すべし。

なすべきときに励むべきである。

【出典】 陶潜「雑詩・其一」
「盛年不二重来一、一日難二再晨一、及レ時当二勉励一、歳月不レ待レ人。」

指導上の注意点

1　再読文字「当」を使った例文。この文字は「まさニ…ベシ」と読んで「（当然）…すべきだ・…のはずだ・…に違いない」の意。原義は「あたる」。物事の道理にぴったり当たる、ということからこのような意味になる。二度目の読み方「ベシ」は活用語尾を送るという送り仮名の原則に従って、「シ」を送る。

2　「勉励」は「勉強」と類似の語。「無理をしてつとめはげむ」意である。

3　古来、勉学すべきことを述べているものと解されているが、詩句本来の意味からいえば、人生の盛りは二度と来ないのだから、充分歓楽を尽くしておくべきだ、との意になる。

訓読と現代語訳

過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。

行き過ぎは不十分であるのとちょうど同じようなものである。

【出典】「論語」先進

「子貢問、師与レ商也孰賢。子曰、師也過、商也不レ及。曰、然則師愈歟。子曰、過猶不レ及。」

指導上の注意点

1　再読文字「猶」は「なホ…ごとシ」と読むが、似たような意味を持つ文字に「如・若」がある。「如・若」が単なる相似・同一をいうのに対して、「猶」は「実際には違うのだが、例えていえばこんなようなものだ」という意味をもち、そのニュアンスを伝えるために再読されている。訳出する際に「ちょうど」と入れるのも同じ理由からである。この例文も、「過」と「不及」とは正反対のことだが、例えていえば同じようなものだ、といっている。

2　「ごとし」に接続する場合、名詞であれば「…ノ」となり、動詞や助動詞など活用する語であれば「連体形＋ガ」となる点に注意する。「ず」の連体形は「ぬ・ざる」があるが、漢文では「ぬ・ね」の活用は用いないことも合わせて指導しておきたい。

3　ちょうどよいことの難しさをいう。及ばないことの非は分かりやすいが、過ぎることの非はなかなか理解されにくい。

訓読と現代語訳

惟だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。

ただ仁者だけが高い位におるべきである。

【出典】「孟子」離婁章句上

是以惟仁者宜レ在二高位一。不仁而在二高位一、是播二其悪於衆一也。

指導上の注意点

1　再読文字「宜」は「よろシク…ベシ」と訓読し、「…のがよ

い」「…すべきである」の意を表す。後に置かれた動詞が表す行為や状態に対し、道理や事情の上から判断して適切であると認定したことを示す働きをもつ。（三省堂『全訳漢辞海第四版』）「べし」は活用語の終止形に接続するが、ラ変型（在り・有り）には連体形に接続する。「ｕ段」に接続する、と教えると生徒は覚えやすい。

2　「惟」は「のみ」と呼応して、限定・断定・強調する形〈ただ…だけだ〉を作る。仁者とは仁徳を備えた人物のこと。

3　仁徳を備え、先王（過去の偉大な聖王）の道（政治）を実践できる者だけが、高い位につく（王となる）のがよい、というもの。

訓読と現代語訳

人生意を得ては須らく歓を尽くすべし。

生きていて心にかなうことがあれば喜びを極めるのがよい。

【出典】「将進酒」李白

君不レ見黄河之水天上来
奔流到レ海不二復回一
君不レ見高堂明鏡悲二白髪一
朝如二青絲一暮成レ雪
人生得レ意須レ尽レ歓
莫レ使二金樽空対レ月
天生二我材一必有レ用
千金散尽還来
烹レ羊宰レ牛且為レ楽
曽須二一飲三百杯一

指導上の注意点

1　再読文字「須」は「すべからク…ベシ」と訓読し、「ぜひとも…する必要がある」という意味を表す。「すべからく」はもともと「すべくあらくは」（サ変動詞の終止形「す」＋推量の助動詞「べし」の未然形＋動詞「あり」の未然形＋体言化の働きを持つ準体助詞「く」）の形。時代が下り、「すべからくは」「すべくあらく」「すべからく」と変化をした。（江連隆『漢文語法ハンドブック』大修館書店Ｐ一九九）「須」の意味は「必須」という熟語を思い浮かべるとわかりやすい。「必須科目」は「必須習得科目（必ず須く習得すべき科目）」のこと。

2　「得意」は思いがかなう意。対義語は失意。「歓」はよろこび。同じ李白の作「春夜宴二桃李園一序」にも「為レ歓幾何（歓を為すこと幾何ぞ）」とあり、夢のようにはかない人生では楽しめ

る時間が短い、と詠んでいる。

3　過ぎゆく時間は後戻りができず、人が老いてしまうのもあっという間である。だから心にかなうことがあったならば、酒でも飲んで楽しもうではないか、という酒を愛した李白らしい詩である。

漢文の基本の構造

漢文は、語の位置関係で意味が決まる。漢文の構造は熟語の構造と基本的には同じである。

構造	例	
①**主語**＋**述語** 何が　どうする	鳥 語(リ)　花 香(ル) 大 器(ハ)　晩 成(ス)	日本語と同じ語順。
②**修飾語**＋**被修飾語** どのような(に)　何だ(どうする)	天 下(ノ)　英 才	日本語と同じ語順。
③**主語**＋**述語**＋**目的語** 何が　どうする　何を	仁 者(ハ)　愛(スレ)人(ヲ)	目的語は述語の下にくる。
④**主語**＋**述語**＋**乎・于・於**＋**補語** 何が　どうする　何に(と・より)	良 薬(ハ)　苦(シ)二(ニ)於 口一(ニ)	補語は述語の下にくる。補語の上に助字がくることが多い。
⑤**主語**＋**述語**＋**目的語**＋**乎・于・於**＋**補語** 何が　どうする　何を　何に	夫 差 敗(ル)二越(ヲ)于 夫 椒一(ニ)	「述語＋目的語＋補語」の順の形。用例の多い構造。
⑥**主語**＋**述語**＋**補語**＋**目的語** 何が　どうする　何に　何を	(曹)操 遺(おくル)二(孫)権(ニ)書(ヲ)一	⑤で、述語が授与動詞などのときは、目的語と補語の順が逆になり、通常は置き字を用いない。
⑦**主語**＋**述語**＋**補語**＋**乎・于・於**＋**補語** 何が　どうする　何に　何に 第二補語	(臣)見(ユ)二将 軍(ニ)於 此一(ニ)	二つめの補語は場所を示す場合が多い。

P121

学習のポイントの解答例

1 次のように返り点を施された文は、どのような順序で読むか、□に番号を入れてみよう。

(1) □ □レ □ □レ □レ □。
(2) □レ □二 □ □二 □ □。
(3) □二 □ □一 □二 □ □一。
(4) □レ □ □二 □レ □。
(5) □下 □二 □ □一 □下 □。

【答】(1) 1 3レ 2 6レ 5レ 4。
(2) 6レ 5二 1 4二 2 3一。
(3) 3二 1 2一 5二 6 4一。
(4) 2レ 1 6二 3 5レ 4。
(5) 8下 3二 1 2一 7下 4 6レ 5。

2 次の文を、書き下し文に改めてみよう。

(1) 聞レ一(キイテヲ)以知レ十(テルヲ)。
(2) 遂(ツヒニ)迷(マヨヒテ)不二復得一レ路(みちヲ)。
(3) 得二天下(テンカノ)英才一而教二育之一(これヲスクフニ)。
(4) 君子欲下訥(トツナラント)二於言一而敏上於行(ニヲコナフニ)。

【答】(1) 一を聞いて以て十を知る。〔物事の一部を聞いただけで全部を理解できる。〕（「論語」公冶長）
(2) 遂に迷ひて復た路を得ず。〔そのまま迷ってしまって、もう二度と道を見つけることができなかった。〕（桃花源記）
(3) 天下の英才を得て之を教育す。〔天下の優れた人材を集めて教育する。〕（「孟子」尽心上）
(4) 君子は言に訥にして行ひに敏ならんと欲す。〔君子は口は重くても行動は敏速でありたい。〕（「論語」里仁）

3 次の読み方に従って、白文に訓点を施してみよう。

(1) 陰徳有る者は必ず陽報有り。
　陰徳有者必有陽報
(2) 虎穴に入らずんば虎子を得ず。
　不入虎穴不得虎子
(3) 夏の虫は与に寒を語るべからず。
　夏虫不可与語寒
(4) 天下水より柔弱なるは莫し。
　天下莫柔弱於水
(5) 悪の小なるを以て之を為すこと勿かれ。
　勿以悪小而為之

【答】(1) 有二陰徳一者必(ハヅ)有二陽報一。
〔人知れず善行を重ねる者には、必ずよい報いがあるものだ。〕（「淮南子」人間訓）
(2) 不レ入二虎穴一(ニ)不レ得二虎子一(ヲ)。
〔危険を冒さなければ、大きな収穫をあげることはできない。〕（「後漢書」班超伝）

(3)　夏虫不レ可二与語一ヲ寒。
〔夏の虫とは、冬の寒さについて一緒に語ることはできない。〕
（「淮南子」原道訓）

(4)　天下莫二柔二弱於水一。
〔天下に水より柔弱なものはない。〕（「老子」第七十八章）

(5)　勿レ以二悪小一而為レ之。
〔悪いことは、それがどんなに小さいことだといっても、してはならない。〕（「三国志」蜀書・先主伝注）

言葉と表現の解答例

1　**次の四字熟語について意味を調べ、訓読してみよう。**

(1)　**朝令暮改**　(2)　**呉越同舟**
(3)　**傍若無人**　(4)　**臨機応変**
(5)　**以心伝心**　(6)　**不倶戴天**

【答】　(1)　朝、命令をだして、夕方にはそれを変更する。むやみに命令や法律を変更すること。
〔朝に令し暮れに改む。〕

(2)　仲の悪い者どうしが同じ場所に居合わせること。また、仲の悪い者どうしが共通の利益のために手を結ぶこと。
〔呉越舟を同じうす。〕（「同じくす」でも可）

(3)　周囲の人の目など気にせず、勝手気ままに振る舞うこと。
〔傍らに人無きがごとし。〕

(4)　その場その場の状況に応じて適切に対処する。
〔機に臨み変に応ず。〕

(5)　自分の気持ちを相手の心に伝える。禅宗の言葉で言語や文字を用いないで、心から心に伝えて自ら悟らせること。
〔心を以て心に伝ふ。〕

(6)　同じ天の下に生かしてはおけないほど、深く恨むこと。
〔倶には天を戴かず。〕

（宮　利政）

学習のポイントの解答例

1　**次の熟語を例にならって訓読し、書き下してみよう。**

(例)　**未来→未だ来らず。**

(1)　**将来**　(2)　**当然**　(3)　**未完成**　(4)　**未納金**

【答】　(1)　将に来らんとす（将レ来）

(2)　当に然るべし（当レ然）

(3)　未だ完成せず（未二完成一）

(4)　未だ納めざる金（未レ納金）／未だ金を納めず（未レ納レ金）

▼ポイント▲　再読文字を書き下す場合には、二度目の読みは平仮名にすることを徹底させたい。(4)は二通りの解釈が可能である。我々が一般的に用いている「未納金」は「まだ納めていないお金」という意味だが、「まだお金を納めていない」という解釈も可能。

2　**次の読み方に従って、白文に訓点を施してみよう。**

(1)　**応に故郷の事を知るべし。**

応　知　故　郷　事

(2)　**鄭人に且に履を買はんとする者有り。**

鄭　人　有　且　買　履　者

(3)　**盍ぞ疾を以て辞せざる。**

盍　以　疾　辞

【答】　(1)　応レ知二故郷ノ事一ヲ。〔きっと故郷のことを知っているだろう。〕（「雑詩」王維）

(2)　鄭人有二且レ買レ履ヲ者一。〔鄭の人で、履物を買おうとしている者があった。〕（「韓非子」外儲説左上編）

(3)　盍二以レ疾ヲ辞一ヲ。〔どうして病気を理由に辞退しないのか。〕（「続資治通鑑」）

▼ポイント▲　訓点を施す作業では、送り仮名をどのようにつけるのかで躓く生徒が多い。この学習では再読文字の訓読の仕方を確認するとともに、二度目に読む読み方の送り仮名をどのようにつけるかを確認したい。

（宮　利政）

漢和辞典の使い方

はじめに

昨今生徒が辞書を引く場合、紙の辞書や電子辞書に加えて、スマートフォンの辞書アプリやインターネット上の辞書を使用する者まで幅広く見受けられる。手軽に辞書を引けることは何よりであるが、漢和辞典にはかなり膨大な情報が記載されており、どのように活用したらよいかは初学の段階で一度教員から伝えるとよいだろう。

漢和辞典を手にとってみると、まずは序文や凡例が書かれている。漢和辞典は基本的に、漢文を読むのに資することを想定しており、用例も概ね漢籍から取られている。国語辞典にも漢字や熟語の説明は記されているが、漢字と熟語がそれぞれ五十音順に掲載されているため、漢字の意味とその漢字を用いた熟語とを一度に俯瞰するには不向きであることを確認しておきたい。

漢和辞典の構成

各辞書の凡例をご覧いただくと辞書ごとの構成が詳しく説明されている。生徒が手に取る小型の漢和辞典を例に見てみると、親字を配列してその意味や用法を説明し、その後に熟語を載せている構成が見て取れる。親字は『康熙字典』に基づく部首ごとに配列され、各部首の画数が少ない漢字から順に配列してある。また、部首内での画数が同じ場合は、代表的な字音または常用音訓の五十音順に配列されている。

親字の字体は、『康熙字典』の字体に従っているものが多いが、「常用漢字表」（＊1）および「人名用漢字表」（＊2）に含まれる「常用漢字」「人名用漢字」は、それぞれの表に拠って表示されているものも多い。また、概ね旧字体や異字体が併記してある。余談になるが、字体・字形については、文化庁から「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）について」（平成二十八年二月二十九日付）（＊3）が出されており、こちらも指導の上で参考にしていただきたい。

親字の中でもとりわけよく用いられる漢字として「教育漢字（常用漢字のうち、小学校で学習する漢字）」や「常用漢字」「人名用漢字」などがあるが、色を変えたり記号を付けたりして、それと分かるようになっている場合が多い。また、日本で作られた漢字（国字）には、それと分かるような記号が付けられている。

漢字の読み方については、字音（中国から伝わった漢字の音）と字訓（漢字の意味を表す日本固有の読み方）が示してある。字音は、漢音・呉音・唐（宋）音、および日本で慣用的に用いられている慣用音を、それぞれ分かるようにカタカナで示してある。字訓はひらがなで示し、送り仮名の部分にはハイフンなどで切れ目が入っている。

謝　シャ（漢音）　ジャ（呉音）
　　あやま-る

また、字音の異なりによって意味が異なる場合は、字音によって意味を分けて表示してある。

易　イ…やさしい
　　エキ…交換する

詩韻については、高校の学習ではあまり触れることがないが、漢詩の押韻を考える上では重要な知識である。一般的には平水韻の分類に基づく韻字が示され、その四声（平声・上声・去声・入声）が何らかの記号によって示されている。

他に現代中国音がピンイン方式によって示されている場合もある。

次に字義についてである。漢字は長い時間の中でいくつもの意味が派生したため、一字多義となっている字が多い。

謝　①わびる　②礼をのべる　③ことわる
　　④告げる　⑤入れ替わる

そこで、漢和辞典では字義の説明に加えて、その字義で漢字を用いた熟語が提示されている場合が多い。熟語となることで漢字の意味が確定され、理解しやすくなるためである。漢文を読む場合にも意味の分かりにくい字は熟語を想起する、という考え方は役立つことをぜひ生徒にご説明いただきたい。ただし、すべての語義に熟語が存在する訳ではなく、区別の難しい場合もあることを付記しておく。

①わびる「謝罪」　②礼を述べる「謝恩」
③ことわる「謝絶」　④つげる　⑤入れ替わる「代謝」

また、漢字には日本語独自の意味用法が定着している場合もあり、現代日本語の中で用いられる用法を「日本語用法」として取り立てて説明している場合もある。

頂〔日本語用法〕「もらう」、「食べる」などの謙譲語

〈熟語〉

字義の説明の後には、その漢字を一字目に用いた熟語とその意味が配列されている。配列は主に二字目以降の読みの五十音順に従っている。基本的には、親字が前につく熟語が配列されるが、親字が後につく熟語について、最後に示す場合もある。

熟語の意味については、漢字の場合と同様に①②③…、さらにはアイウ…と分けて示してある。日本語特有の意味及び和製漢語については、それと分かるような記号を付してある。

そのほか、日本の古典や地名・姓氏名、動植物名、西洋人名、地名の漢字表記など、当て字、熟字訓や読み方の難しい語は「難読語」などとしてまとめて表示されることが多い。

＊1　常用漢字表（平成二十二年内閣告示第二号）
(https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo_20101130.pdf)
＊2　人名用漢字表
(https://www.moj.go.jp/content/001131003.pdf)
＊3　文化庁「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告　平成二十八年二月二十九日　文化審議会国語分科会）」
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/92550601_01.pdf)

漢和辞典の引き方

教科書一二四ページにフローチャートで示したが、漢和辞典で

漢字を調べる場合、漢字の読み方が分かる場合には音訓索引で調べるのが手早い。それぞれの音訓の中は画数順に漢字が並んでいる。「謝」を調べるには「シャ」の項目または「あやまる」の項目を調べることになるが、「シャ」は同音異字がたくさん存在するため、次に画数で十七画目を探すことになる。同訓異字は同音異字に比べて少ないため、音訓索引による検索では、字訓で引く方が手早く検索可能である。

もし漢字の読み方が分からない場合は、部首索引を用いて検索をする。部首の当たりをつけて当該部首のページを開くと画数順に漢字が並んでいるので、そこから探すこととなる。現在多くの漢和辞典が採用している部首は『康熙字典』の二百十四部首だが、各社ともに検索がしやすいよう、『康熙字典』の分類には含まれない部首を新たに設けている場合もある。また、漢字のどの部分が部首になるのか、というのは一概には言うことが難しく、生徒が当たりをつけた部首に掲載されていない場合もある。「夢」は「夕」部に分類されるが、多くの生徒は「艹（艸）」部を検索するだろう。最近の辞書では誤った部首で検索をしても、その漢字が掲載されているページへと誘導してくれるものも多い。

音訓も部首も不明な場合は、総画索引を用いて検索をする。総画索引は画数の少ないものから順に、また同じ画数の中では部首ごとに漢字が示してある。頭から全部目を通していけば見つけることは可能だが、結局は部首の当たりをつけて探した方が早い、ということになる。

漢和辞典の辞書アプリケーションについては、『漢辞海』、『新字源』、『新漢語林』、『漢字源』を購入することができる。スマートフォンやタブレットといったデバイスでも検索可能であり、紙の辞書と同様に例文や付録も掲載されている。

また、パソコンにインストールして使用するソフトとしては、『新字源』や『新漢語林』、『漢字源』が購入可能である。

アプリやソフトの便利な点は、デバイスの検索結果を直接黒板などに投影できる点である。漢字の意味がたくさんある場合など、生徒と一緒にどの意味に該当するのか、と確認をしながら授業を進められ、意味を確定する作業を共有することで生徒自身が漢和辞典を活用するサポートにもなるだろう。

他にオンラインで利用可能な漢和辞典もあるので、以下に紹介する。生徒が一人一台のデバイスを利用できる場合などでは、活用いただきたい。

・**「漢字辞典 online」**

漢字の部首・画数・読み方・筆順・意味などを調べることができる漢字辞典サイト。その漢字を使った難読読み、四字熟語やことわざなどもあわせて掲載されている。

（https://kanji.jitenon.jp/）

・**「goo 辞書」**

漢検「漢字ペディア」、小学館「デジタル大辞泉」に収録された約五〇〇〇項目の漢字がまとめて検索できる漢字辞典。漢字の画数、部首、読み方、意味などが調べられる。

（https://dictionary.goo.ne.jp/）

P124

言葉と表現の解答例

1 **次の熟語の意味を漢和辞典で調べ、熟語の構造を考えてみよう。**

(1) **気絶**　(2) **非難**　(3) **是正**　(4) **必要**
(5) **啓蒙**　(6) **暴露**　(7) **暴発**

【答】

(1) 息が途絶える。「気（き）」＋「絶（たユ）」の主述関係。
(2) 他人の欠点や過失を責めとがめる。「非（そしル）」＋「難（なじル）」の並列関係（同格二字）。
(3) 誤りを正しなおす。「是（ただス）」＋「正（ただス）」の並列関係（同格二字）。
(4) どうしても〜しなくてはならない。「必（かならズ）」＋「要（もとム）」連用修飾。
(5) おろかな者・知識の浅い人を導き、はっきりわからせる。「啓（ひらク）」＋「蒙（くらキモノヲ）」の述語＋目的語。
(6) そとにさらされる。かくれていたことをあらわにする。「暴（あらハス）」＋「露（あらハス）」の並列関係（同格二字）。
(7) 事件などが突然起こること。「暴（にはかニ）」＋「発（おこル）」の連用修飾。

▼ポイント▲ 熟語を漢和辞典で引いて意味を確認し、その後、構成する漢字の意味を漢和辞典で確認するとよい。いくつも載っている意味のうち、どの意味で熟語に用いられているのかを考えさせたい。また、その意味を踏まえて、熟語の構造を考えさせたい。

2 **次の漢字や熟語の意味を漢和辞典で調べ、現代日本語の意味との違いを確認してみよう。**

(1) **鬼**　(2) **城**　(3) **故人**　(4) **人間**
(5) **百姓**　(6) **小人**　(7) **学者**

【答】

(1) 〔漢文〕亡霊。死者。（「キ」と読む）〔日本語〕おに。
(2) 〔漢文〕都市の周りの城壁。町。〔日本語〕武士の居館。
(3) 〔漢文〕昔なじみの人。旧友。〔日本語〕死んだ人。
(4) 〔漢文〕人の世。世間。（「ジンカン」と読む）
〔日本語〕ひと。人類。
(5) 〔漢文〕庶民。人民。（「ヒャクセイ」と読む）
〔日本語〕農民。
(6) 〔漢文〕身分の低い者。つまらない人物。（「ショウジン」と読む）
〔日本語〕幼い人。こども。
(7) 〔漢文〕学問をする者。学問を志す人。
〔日本語〕学問や研究に従事する人。研究者。

▼ポイント▲ 漢文を読み進める上で、後々登場してくる日漢異義語を挙げた。百姓のように読み方からして異なる場合もある（ヒャクセイ／ヒャクショウ）ので、合わせて確認させたい。

（宮　利政）

単元の言語活動１　熟語の意味「創作」ゲームを行う

活動のねらい

孤立語である漢文を読むうえでは、漢字と漢字の関係を理解することが重要である。

この活動では、二字熟語を用いて漢字同士の関係を推測する作業を、「ゲーム」という他者と競う要素を持たせつつ楽しみながら体験してもらうことがねらいである。熟語の構造に関する知識は中学校ですでに学んでおり、単元の導入でも触れている。またゲームを進める中でグループのメンバー同士がやりとりをし、自然と復習する状況が生まれることも期待したい。さらには、他のメンバーに選ばれやすい「創作」と選ばれにくい「創作」を、ゲームを通じて自発的に意識させることもねらいである。

どうしても一方的な講義にならざるをえない初学の段階で、グループ活動での試行錯誤を通じて、生徒自身が主体的に学習に取り組むことをねらいとしており、はじめはぎこちないかもしれないが、ぜひ生徒自身の試行錯誤を引き出せるよう、コーディネートをお願いしたい。

タイトル・序文の解説

一九九三年に「たほいや」というテレビ番組が放映された。この番組で行われたゲーム「たほいや」は『広辞苑』を用いたゲームである。このゲームは『広辞苑』に掲載されている聞き慣れない単語をリーダーがお題に選び、メンバーにすべてひらがなでお題を示すことから始まる（例１）。メンバーはさも辞書に掲載されていそうな説明文を「創作」し、リーダーに渡す。リーダーは辞書の説明と、「創作」された文とを読み上げ、メンバーはそこから正解を推測し、点数をやりとりして楽しむ、というものである。たとえ正解しなくても、自分の創作した説明文が選ばれると点数が増える、ということもゲームの面白さを高めてくれる。本活動はこの「たほいや」というゲームを漢和辞典を用いて実践する、という活動である。

例１　お題「灰猫」→提示「はいねこ」
正解　灰色の猫
創作　はいはいの形で寝ている猫。かわいらしい様子
　　消防士の古称
　　ハイネからとれる粉
　　工事現場などで用いる、運搬用の一輪の手押し車

「たほいや」では、国語辞典に掲載されている単語をすべて平仮名で示された場合、意味を考えるには音の響きや単語の切れ目を想像して「創作」することになる。本活動では二字熟語を提示するため、意味を「創作」するには熟語を構成する漢字それぞれの意味と、漢字同士の関係を推測することが基本となる。熟語を構成する漢字の持つ意味からまったく連想できない説明を「創

作」してもよいため、漢字の知識がない生徒にも参加はしやすい。ただし、ゲームを重ねるうちに、漢字の知識を持っている方が「創作」への支持が集まりやすいことに気づくだろう。漢和辞典を引くことを目的ではなく手段とし、ゲームで勝利するために漢和辞典の説明の文体や漢字の意味、熟語の構成を考え、どうすれば他のメンバーに自作の「創作」文が支持されるのかを考える、という作業に自ら進んで取り組むようになることを期待した活動である。

「課題」の解説

課題　**熟語の意味を「創作」して支持数を競い合い、多くの人に支持される「創作」の特徴を見つけ出そう。**

この活動はゲームで勝つことを目的とし、漢和辞典を引くことを手段とすることで、ゲームでの勝利を目指して主体的に漢和辞典を引くことをねらいとしている。ゲームで勝つには自分の「創作」した説明文が多くの支持を集める必要があり、そのためには漢和辞典に掲載されている説明の文体や、漢字の知識が必要となる。回数を重ね、他のメンバーの言い回しや正解の説明の表現に触れることで、各メンバーの「創作」が上達することも期待している。

ただ、最初は意味を「創作」する作業が難しく感じる生徒も多いだろう。その対策として、教科書には「蓮歩」という熟語と、その「正解」文（Aさんの文）、「創作」文（B～Eさんの文）を掲載した。まずは「蓮歩」の意味を説明した文五つを教員が読み上げ、生徒に考えさせたあと、各説明文ごとに選んだ者を挙手させ、なぜその選択肢を選んだのかを発表させてみていただきたい。それぞれの生徒がどのような観点（漢字の意味、熟語の構成、その他）で熟語の意味を想像したのかを共有することで、他のメンバーから支持されやすい説明文の方向性がなんとなく共有できるはずである。最後に正解を発表（Aさんの文）してゲームの擬似体験は終了となるが、「蓮歩」以外にもいくつか教員が熟語を選び、リーダー役として「熟語」を生徒に提示し、口頭で「正解」文と「創作」文を読み上げてゲームに慣れさせてみてもよいだろう。正解だと思う説明を選ばせたあと、その説明が正解だと思った理由を全体またはグループで共有する、という作業を繰り返すことで、よりスムーズに活動に入れるだろう。

以下に一例をお示しするので、読み上げる順序を入れ替え、ご活用いただければ幸いである。

例　「二更（にこう）」
正解　「夜を五区分した、その二番目の時間」
創作　「二度見直しをすること」
　　「何度も繰り返すさま」
　　「一度左遷された者が再びもとの官職につくこと」
　　「長官の補佐役」
　　「酸鼻（さんび）」
　　「鼻にしみてなみだが出そうになるほど、いたみ悲しむ」
　　「江戸時代の処罰の一つ」

「酢」
「柑橘類などの酸っぱさが鼻につくさま」
「鼻の奥が入り組んでいるさま」

例
正解
「黒風（こくふう）」
「荒い風。砂塵を吹き上げる風」
創作
「よこしまなさま」
「冬に吹く風。北風」
「ゆがんだ風習」
「きよらかな風。すずしい風」

活動の解説

1 漢和辞典から熟語を一つ選び、意味を「創作」してみよう。

①グループを作り、リーダーを決める。

一グループの人数は活動のしやすさを考え、四名か五名がよい。リーダーは交代制のため、誰からスタートしてもよい。

②リーダーは熟語を選び、そのほかのメンバーがその意味を「創作」する。 知技(1)ウ・(2)ウ

・見慣れた漢字の熟語だが、意味を知らない熟語を選ぶ。
・「正解」ではなく、他の人に支持されそうな文を書く。
・漢和辞典の言い回しに似るよう、工夫する。

この活動では漢和辞典を用いるように注意したい。国語辞典にも熟語が載っているため、国語辞典を用いる生徒もいるかもしれないが、漢和辞典のほうがより豊富に漢字の意味が掲載されており、活動もしやすい。

熟語を選ぶ際には、誰もが意味を「創作」しやすいよう、見慣れた漢字の熟語から選ぶように促していただきたい。その際、意味がすぐに分かってしまうものではつまらないので、探すのに時間が掛かる場合がある。一人一冊漢和辞典を準備できる場合には、まずはメンバー全員で辞書を見る時間を設けるなどして、当たりを付けさせておくと良いだろう。グループに一冊の場合には、探す時間を限定し、時間内で取り組ませるとよい。また意味が一種類のものに限定した方が他のメンバーは意味を「創作」しやすいが、あまり厳密に考えず生徒に任せてもよい。紙製の辞書はランダムに熟語を探しやすくおすすめだが、電子辞書や辞書アプリを使っても実践は可能である。

リーダーが熟語を選んだら、小さなホワイトボードや白紙を用意しておき、そこに書き出して共有させるとよい。

ゲームに慣れないうちはどうしても正解を想像して「創作」してしまいがちであり、正解と似通った「創作」文がならぶこともある。そのような場合も「辞書」の文を正解としておくとよい。ゲームを重ねるうちに、他のメンバーに選ばれそうな説明を「創作」した方がゲームに勝ちやすいことに気づいてくるが、いつまでも正解と似通った「創作」文が並ぶようならば、教員からアドバイスをしていただきたい。

「創作」文は別紙（「意味記入用紙」）に丁寧に記入させ、終わった者からリーダーに渡すよう、促す。

【評価】・漢和辞典から熟語を一つ選び、意味を「創作」することで、我が国の言語文化に特徴的な語句について、語感を

磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・漢和辞典から熟語を一つ選び、意味を「創作」することで、訓読のきまりなどについて理解しているか、確認する。

③リーダーは漢和辞典にある「正解」文を書き写す。

後で読み上げるときに備えて「正解」文は正確に書き写し、言い淀みそうな部分にはふりがなを振っておくとよい。

2リーダーは、「創作」文と「正解」文を読み上げよう。

①「創作」文を回収し、読めない文字がないか目を通す。

後で読み上げるときに言い淀むことがないよう、リーダーは「意味記入用紙」を受け取ったら「創作」文に目を通す。読めない漢字や読みにくい文字がある場合はメンバーに戻し、ルビを振ってもらったり書き直してもらったりするとよい。

②読み上げる順番を決め、各「創作」文と「正解」文に番号を振る。

回収した「創作」文と「正解」文に読む順番を書き込む。正解の番号には○をつけるなどしておくとよい。

③聞き取りやすいよう、はっきりと読み上げる。

他のメンバーが聞きやすいように抑揚や速さに留意して読み上げさせるとよい。同音異義語を含み、耳で聞いただけでは伝わらない文もあるだろうが、あくまでも「耳で聞いた音の響きで想像させる」こともゲームの一環だとご理解いただきたい。読み上げる回数を一回に設定するとメンバーは集中して聞くようになるが、回数については状況に応じてご判断いただき、聞き逃した箇所があれば再度読み上げてもらうなどご調整いただきたい。別紙（「点数計算用紙」）にメモ欄を設けてあるので、活用を促していただきたい。

3メンバーは「正解」文を予想し、その番号を表明しよう。リーダーは「正解」文の番号と、それぞれの「創作」文の作成者を発表しよう。

メンバーは「正解」文の番号を予想し、別紙（「点数計算用紙」）に番号と賭け点を記入する。全員の記入が終了したら、リーダーが番号ごとに選んだメンバーを確認する。一人ずつ確認してもよいし、番号ごとに挙手をさせるなどしてもよい。その後「正解」文の番号を発表し、さらに各「創作」文の制作者を発表する。ゲームとしての点数のやりとりは別紙（ワークシート）にお示ししてあるが、少々複雑なので、計算方法についてはそれぞれの学校現場に合わせていただくとよい。メンバーの持ち点の合計は変化しないゲーム（ゼロサムゲーム）なので、おはじきなどを持ち点として配付し、やりとりさせてもよいだろう。

自分が正解しなくても、他のメンバーに「創作」文が選ばれると点数が増える、ということもこのゲームを盛り上げる要素の一つである。また、リーダーは熟語の意味を創作しやすいものを選ばないと、簡単に「正解」文を見抜かれてしまうため、自ずと真剣に熟語を選ぶようになる。

4ゲームを振り返り、支持されやすい文の特徴を話し合おう。

①リーダーを交代し、全員がリーダーを経験する。

ゲームが終わるたびに、導入で行ったように自分がどのような基準で「正解」文を予想したのか、簡単に感想戦をしてみてもよい。そうすることで、次のゲームの「創作」文を書きやすくなる。

②選んだ理由を発表し合い、支持されやすい「創作」文の特徴を話し合い、共有する。思表判B(1)オ 主態

すべてのゲームが終了したところで、支持されやすい「創作」文の特徴について、作成者と選択者それぞれの立場から話し合う。グループの中で、作成者はどのような意図をもって「創作」をしたのか、選択者はどのような視点で「選択」したのかをまとめ、可能であればクラス全体で共有をし、本活動の締めくくりとしたい。

【評価】・支持されやすい「創作」文の特徴を話し合い、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えを持とうとしているか、確認する。
・熟語の意味「創作ゲーム」を行うことで、訓読のきまりや熟語の構造を理解し、我が国の言語文化について自分の考えを持とうとしているか、行動を点検したり、ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

（宮　利政）